

新島邸の玄関

笠井 昌昭	同志社大学名誉教授
講師紹介〔かさい・まさあき〕	

依頼を受けて

ご紹介にあずかりました笠井でございます。

この夏の終わり近く、キリスト教文化センター長の鈴木先生から、Doshisha Spirit Weekにまかり出て、同志社のidentityを強めるような話をせよとのお電話をいただきました。私は、学生時代からですと優に半世紀余り、教員になりましてからでも四十三年間を同志社で過ごさせてはいただきましたが、私は、日本の飛鳥奈良時代から、江戸時代中ごろまでの歴史や文化を研究してきた者でありまして、特別に新島襄や同志社の歴史について調べたり研究したりしたことはまったくございません。

したいがまま、とてもご依頼のようなお話をする任ではないと、再三お断り申しあげましたが、おまへはそれだけ長く同志社にいたのだから、何か話はできるだろうと、ねばられました。

振り返ってみますと、私も、新島襄が学んだアメリカ東部のマサチューセッツ（Massachusetts）

州、アーモスト大学（Amherst College）で、一九七三年に一夏を過ごさせていただいたことがありますし、その後、一九八六年の四月から八七年の三月末まで、コネティカット（Connecticut）

州のウエスリアン（Wesleyan University）という大学に招かれまして、一年間の滞在中、二度、三度とお隣の州にありますアーモストを訪ね、アーモスト大学にある同志社ハウスに泊まったこともあります。またボストン美術館（Boston Museum）やハーヴァード大学（Harverd University）

に参りましたときには、折りよくいらっやっていた北垣宗治先生のご案内で、新島が初めてボストンに上陸したときに泊まった船員宿の建物や、新島が大変世話になった恩人のハーディー（Hardy）夫妻が住んでいた家などを訪ね歩いたこともございます。そしてまた、同志社が刊行している「同志社時報」という雑誌がありますが、一九九〇年が新島永眠百周年に当たるといので記念号を出すことになり、編集に当たっていた岡部さんという方に新島邸に連れて行かれて、表紙絵を描かされたようなこともありました。

それらのことを思い返してみますと、新島襄や同志社について、何らかの感想がまったくないわけではありません。そんな感想でよければ、お話ししましょうとお引き受けしてしまっただのですが、いざ考えてみると、そんな感想など五分か十分もあれば話し終えてしまう。しかし、五分や十分の話ではどうにもならないわけできて、一時間近くお話ししなければならないとなると、いったいどうしたものかというので、お引き受けしてしまったことを、後になって大変後悔いたしました。四苦八苦しただけに、映像をお見せして時間を稼ぎながら、新島の面影のほんの一面でもたどってみようと思いつきました。

それと申しますのも、今まで新島についてのお話しをしてくださる先生方にとりましては、新島の学んだアーモスト大学ですとか、アンドウ・ヴァー（Andover）の神学校などは、いちいち説明するまでもない自明のこのようでありまして、ボストンからどのような位置にあるのかというようなことについては、一度も伺った記憶がありません。ですから、私も実際にアーモストに行ってみるまでは、そのイメージがまったくつかめませんでした。念のため、このたび学内中高を卒業した何人かの方にも聞いてみたのですが、そういう地理的な話は聞いたことがないという。だいたい、高等学校などで使う地図帳程度のものには、アーモストも、アンドウ・ヴァーも載っていないのであります。地理的説明もないくらいですから、まして、風土的な説明もほとんどされずに終わっております。それなら、地図をお見せしたり、アーモストのキャンパスその他、近隣の風景などのビジュアルをお見せするだけでも、意義があるのではないかと思ったのであります。

そこで本日は、私が急遽、PowerPointで作りました映像をお見せしながら、お話をさせていただきたいと存じます。

ただ、私はすでに大学を退いておりますから、映像資料も大学まで出かけて行って探すのも大変でございますので、自分で撮影したものをはじめ、私の書斎にあるものだけを動員いたしました。したがって偏りのあるものになっておりますがご容赦願います。そのような限られた範囲の映像ですけれども、作っていく途中であれもこれもと写真を加えましたがために、PowerPointが大変重くなりまして、最初苦心して作りましたものはでき上がった途端に立ち上がらなくなりまして、もう一度作り直す羽目となりました。今日も最後までトラブルのないことを念じております。

前置きが大変長くなりました。

では本題に入りたいと思いますが、まだお話しする中身も十分考えないうちに、事務局から演題を求められ、苦しまぎれに、「新島邸の玄関」と答えてしまいました。多少、奇をてらったような題になり、いったい何を話すのだらうと思っていらっしゃる方も多いのではないかと存じます。「新島邸の玄関」というのは、新島襄や同志社のことを考える入口、という意味も含めれば含めることもできそうですが、まさに新島邸の玄関そのものを話題にすることを意図しております。

十年間のアメリカ生活

それでは、映像をご覧くださいましょう。

まず、新島襄に接することから始めたいと思います。

この肖像画は多くの皆さまにとっては、あまり見慣れないものかと思います。（写真右）

アーモスト大学のジョンソン・チャペル（Johnson chapel）という礼拝堂に飾られている肖像画です。晩年の写真、亡くなる一年前に撮影された写真と推定されていますが、その写真をもとにして、一九〇一年に描かれたものです。大変沈痛な面持ちの肖像画です。この肖像画については、また後でお話します。

皆さんが見慣れているのは、こちらのような肖像画でしょう。（写真左）

新島の肖像画はこの他にもいくつかございます。

次に年表に移ります。

お手元に、より詳しい年表をお配りしておりますが、この画面には、新島がアメリカへ向けて日本を脱出してから、帰国して同志社英学校を立ち上げるまでの、さらには明治十一年に新島邸を新築するまでの、十年余りの期間を示しております。

一八六四年の七月に上海を出港してから、ボストンに着くまでに一年近くかかっておりますが、今日、私たちがアメリカに行きますときには、太平洋を横断していくのでありますけれども、ワイルド・ローヴァー（Wild rover）号という船に乗りました新島は、上海から南下して東南アジアを回り、インド洋からアフリカ大陸をぐるっと回って大西洋に出、北上してボストンにたどり着いているのです。

一八六五年の七月にボストンについて、一八七五年の十一月に帰国するまで、実に十年間に及ぶ外国生活であります。日本を脱出いたしましたのは、ご存知のように、まだ徳川の世でありましたが、帰国したときには明治の近代国家が着々と築かれているときであります。西欧文明を貪欲に吸収しようとしている日本へ、タイミングよく帰国したといえましょう。

明治初期における日本の近代化は、今日からみしても驚くほどの猛スピードで行われておりまして、一例を挙げれば、新島が帰国した明治八年には、その七月に神戸から大阪間に鉄道が通じております。新橋－横浜間に鉄道が通じたのは、さらに早く明治五年のことでありました。

それはそれとして、十年に及ぶ長いアメリカ生活、もっとも、その間には一年余りに及ぶヨーロッパへの教育視察旅行も入っておりますが、とにかく、その十年間を経て日本へ帰国しようとする一八七四年には、まず五月にアメリカン・ボードといっただけでは、何の委員会やら役員会やらわかりませんが、この正式名称は、American Board of Commissioners for Foreign missions

という長い名前でありまして、つまり外国（主にアジア地域であります）へ布教するために宣教師を派遣したり、資金援助をしたりするための組織なのであります。このアメリカン・ボードから新島は日本で布教活動に従事する準宣教師に任命されました。

七月にアンドゥーヴァーの神学校を卒業いたしますと、直ちに帰国に向けての準備に入ったと思われますが、十月には、マサチューセッツ州のすぐ北に隣接するヴァーモント（Vermont）州のラットランド（Rutland）というところで開かれたアメリカン・ボードの集会で演説し、日本にキリスト教主義の学校を設立することを訴え、約五〇〇〇ドルの寄付申込みを得ています。

帰国後一年で開校

そしてその年の暮れ、日本に帰国いたしますと、翌年二月初めにはもう大阪府知事と学校設立の交渉に入っている。関東生まれの新島がなぜ、最初から東京や横浜ではなく、大阪に学校をつくろうとしたのかというと、新島のアメリカン・ボードの派遣准宣教師としての任地が神戸であり、大阪に多くの宣教師たちがいて、彼を待っていたからでありました。しかし、大阪では聖書を教えることは許されず、見込みがないと知って、四月に京都にやってくる。幸い、京都の文明開化を図っていた京都府顧問の山本（やまもと）寛馬（かくま）（この人は薩摩や長州と対立した会津若松の人ですが、その才能と人格が認められて、明治政府に迎えられた人物です）と肝胆相照らしまして、京都に学校をつくることを勧められる。そして六月の初めには旧薩摩屋敷跡の約五八〇〇坪をゆずり受け、十一月二十九日には寺町丸太町上るの仮校舎で、もう同志社英学校を開校しております。教師は新島と宣教師のＪ・Ｄ・デイヴィス（Davis）の二人、生徒は八人でした。宣教師のデイヴィスは、同志社の運営に新島と一体になって、これを助け、新島亡き後も新島の志を継いで、同志社の存続発展に力を尽くした人です。

それにしても、帰国後一年で、しかも仏教勢力の根強い京都で、キリスト教を掲げながら英学校の開校にこぎつけた。よくも出来たものと、実にあきれくるくらい、大変なスピードです。

新島の行動を見てみると、とにかく、やるのが早い。少しも立ち止まらないのです。

翌年一月に新島は山本寛馬の妹の八重と結婚し、十月には女子塾を開いて、あくる明治十年には京都府から女子学校の開校許可を得ている。英学校を立ち上げたばかりなのに、その一年後には女子学校もつくっているわけで、本当に恐るべきスピードです。

話は先走りますが、この後、明治十二年に、新島は初めて勝海舟を訪ねております。「余裕」ということを以て生活信条とする勝海舟は、新島のこの性急さを大変危ぶんで、しきりに警告しております。数年後、新島自身が勝海舟への手紙のなかで、「非常に御たたき下され候先生の御言葉」と書いているように、ともかく初めて会った勝から新島はキリスト教主義学校の設立について、めちゃくちゃ否定的なことを言われたらしい。アーモストの同級生たちから「怒った顔を見たことがない」と言われていた新島も、このときは「怒って帰ってしまった」と、後に勝は言っております。

話をもとに戻しまして、明治八年十一月の末に、わずか八人の生徒で開校した同志社英学校にとって幸いしたのは、おおかたご承知のところと思いますが、あくる明治九年の秋、熊本洋学校から、大挙して生徒たちが移ってきたことであります。

熊本バンド

熊本洋学校と申しますのは、明治維新で薩摩藩や長州藩に遅れをとった熊本藩が、残された道は人材養成しかない、と西洋文明の導入を目的に、明治四年に設立した学校です。

キャプテン・ジェーンズ（Captain L. L. Janes）という南北戦争の生き残りの砲兵大尉で、ピューリタンの人が教師として迎えられました。初めは、キリスト教にはまったく触れず、普通の授業をしていただけでありましたが、年月が経ち生徒たちとのつきあいが深まってくると、自然とキリスト教の話もするようになる。その感化を受けた生徒たちは、明治九年一月に熊本郊外の花岡山に集まって、キリスト者として神に誓いを立てました。しかしこれが公になると、激しい反キリスト教運動が起こり、あげくの果てに熊本洋学校は閉鎖されてしまったのです。

そして、ジェーンズは生徒たちを新島に託したのでした。デイヴィスは、ジェーンズの存在も熊本洋学校のこともまったく知らずにいて、ジェーンズから学生たちを託する旨の手紙を受け取ったときは大変驚いたといいます。

このとき、同志社に移ってきましたのは、金森（かなもり）通倫（みちとも）・海老名（えびな）弾正（だんじょう）・横井（よこい）時雄（ときお）・徳富（とくとみ）蘇峰（そほう）・浮田（うきた）和民（かずたみ）・原田（はらだ）助（たすく）などなど三十人あまりの人たちで、いずれもそれぞれに同志社の基礎を築いたばかりでなく、後にいろいろな方面で明治の日本を背負った人たちであります。そしてこれら熊本洋学校から移ってきた人たちは、同志社の宣教師たちから「熊本バンド」と呼ばれるようになりました。バンドとは、ジャズ・バンドなどというときのバンドと同じでありまして、グループの意味であります。

このようにして学校の形はともかく整ってきましたが、これは資金的には、アメリカン・ボードに多くを拠っている。アメリカン・ボードは先に申しましたように、キリスト教伝道のための組織ですから、学校を建てるにしても、いわゆるトレーニング・スクール、聖書を中心とした授業で、伝道者を養成すれば事足りるというのが基本的な考えです。それに対して、新島は「私たちの学校は、トレーニング・スクールにとどまらず、大学とならなければ、私たちの仕事を成功させることは出来ないと確信しています」と、明治八年の早い段階で言っています。新島の頭には、学校を建てようとした最初から、大学のイメージがあったのでした。「神学と聖書だけを教えるのであれば、最も優秀な日本の若者たちはここにとどまらないだろう。彼らは近代科学を求めているのだ」と新島はアメリカに書き送っています。

しかし、同志社の教師となった宣教師たちの多くは、同志社はアメリカン・ボードが多大な金を出しているのだから、自分たちの学校、アメリカン・ボードの学校だと思っている。学生たちの眼には、そういう宣教師たちに対して日本人の教師たちが遠慮しすぎているように見える、そのことが学生たちにとっての不満となり、明治十三年には、熊本バンドの面々が、同志社を退学してしまうような騒動も起きてしまうわけです。

話がまた先走りました。

ともかく熊本バンドの生徒たちが加わって、学校の体裁は整う、そして明治十一年に寺町丸太町上るに、新島邸が竣工します。

アーモストとアンドゥーヴァー

では写真に移ります。

まず地図を見ていただきましょう。

これは高等学校用の地図帳からとったものです。ニューヨークやボストンの位置をお確かめください。アーモストなどはとても載っておりません。辛うじてここに、新島が日本への手紙のなかで、「アーモストの近くに春日野（かすがの）というところがあります」と書き送っているスプリングフィールド（Springfield）という町が載っていますが、アーモストはこのスプリングフィールドの北に位置します。次の地図を見てみましょう。これはアメリカの道路地図ですから、かなり詳しく載っています（前ページ地図）。

ボストンからまっすぐ西へ、ここがアーモストです。一九七三年当時でも、学生人口を除いた町民だけの人口は二千人余りということでしたから、本当に小さな大学町です。ボストンからアーモストへ、自動車で三時間前後かかります。

アンドゥーヴァーはボストンの北二十三マイルのところにあります。

アーモスト大学のキャンパス風景です。こういう木立に囲まれたところもあれば、このように広々したところもあります。広大なキャンパスは、実に変化に富んでいます。

先ほど申しましたジョンソン・チャペルです（前ページ写真）。チャペルの右側、ちらっとだけ少し建物が写っていますが、これが一八二一年にアーモスト大学が創設された当時のサウス・カレッジ。四階建てのレンガ造りです。左側がその後でつくられたノースカレッジ。内村（うちむら）鑑三（かんぞう）はここで過ごしました。

ジョンソン・チャペルの内部です。この二階の回廊に最初にお見せした新島の肖像画が飾られています。

アーモストでは、卒業生たちが、卒業して三十年経ったときに、クラスの代表者をひとり選んで、その人の肖像画を描き、大学に贈るという習慣があったのだそうです。新島のクラスの人たちは、アメリカ人のクラスメイトではなく、はるばる東洋からきた新島をクラスで一番高潔な人格者だったと回想して、代表に選んだのでした。

大学前のアーモストの町。町らしい雰囲気はこの一角だけです。一九七三年に訪れたときも、一九八六年に参りましたときも、まったく変わりありませんでした。ウェブスター（Webster）

という有名な英語の辞書がありますが、このレンガ建ての建物の二階に、ウェブスターが辞書の編纂に当たった部屋があるということです。

キャンパスの外れから見たやや荒涼とした雪景色。これは今から二十年前の写真ですが、このような風景は、明治時代とあまり変わらないのかもしれない。

ニューイングランドは、とても秋の木々の色づきが美しいところです。何枚か、赤や黄に彩られた秋景色の写真をお目にかけましょう。

この美しい秋が終わるとと厳しい冬がやってきます。

緯度的には、旭川よりも北。一月ごろは、マイナス二十度以下にまで気温が下がります。

ついでに申しますと、いたるところでリスが走り回っています。私などはつい立ち止まって見たり、カメラを向けたりいたしました、向こうの人たちにとっては、リスは、日本の鳩のような存在で気にもかけず、風景の中にとけこんでおります。

京都の新島邸

さて、このようなところで十年間を過ごした新島が、明治十一年に建てた家が、この写真の建物です。

現在の地名でいえば、京都市上京区寺町通丸太町上の松陰町一四〇番地の四に在ります。ここは明治八年十一月の末に仮校舎として同志社英学校を開校した記念すべき場所でありました。

建物は、木造二階建て、宝形（ほうぎょう）造りに近い寄棟造（よせむねづくり）棧瓦葺（さんがわらぶ）きの屋根がつかます。屋根のつくりは純和風といえましょう。一、二階とも平面をほぼ田の字型に区切った四室からなり、一階東北隅の部屋を応接室にあてています。この母屋の北に接して、玄関、二階への階段、そして平屋の調理室、物置、浴室、トイレが付属しています。

母屋の外観は、白壁とこげ茶色に塗られたようい戸との組み合わせで、深い底をもった東南北の三方に一、二階ともベランダがめぐられ、なかなか瀟洒（しょうしゃ）な住宅建築です。

このようなベランダをもった住宅建築は、コロニアル・スタイル（Colonial style）と呼ばれるもので、おそらく新島がアメリカ生活のなかで深く印象づけられた住宅形式だったのでしょう。ところで、このような瀟洒な洋風建築の北に接して、玄関があると先ほど申しました。この写真の向かって左の角を曲がったところです。この玄関は、ほとんど写真に撮られることはありませんで、私の絵で恐縮ですが、このようなものです。洋風の母屋に対して、大変ちぐはぐな日本建築となっています。

明治十九年に同志社に再入学を志してやってきた徳富（とくとみ）蘆花（ろか）は、京都に着くとすぐさま新島宅を訪れたときのことを、のちに『黒い眼と茶色の目』という小説のなかで、次のように綴っています。

京都に着くと、敬二は寺町の飯島先生の門に車を下りて、チョコレート色に塗った格子戸をあけて、昔ながらの狭い玄関の銅鑼を鳴らした。

「チョコレート色に塗った格子戸のある玄関」、まさにこの絵のとおりでして、その様子は今もそのまま変わってはおりません。

玄関とは

今日の私たちは、日本の住宅の入口はどのようなものであれ、アパートやマンションの入口さえも玄関と呼んで、玄関とは、それぞれの家に履物を脱いで上がる場所のことだと思っておりますが、家々の入口を、一般に玄関と呼ぶようになったのは、ごく最近のことであります。

今からちょうど百年前、一九〇六年に夏目漱石が有名な小説『坊っちゃん』を書いています、この小説は、玄関に始まって、玄関で終わるという構成をとっております。

「親譲りの無鉄砲で小供の時から損ばかりしている」と書き出される『坊っちゃん』は、「こいつはどうせ碌なものにはならない」といつも父に言われ、「乱暴で乱暴で行く先が案じられる」と母親を歎かせてばかりいますが、ばあやの清（きよ）だけは、坊ちゃんは将来、立身出世して立派なものになると思い込んでおり、「立派な玄関のある家をこしらえるに相違ない」と言っていたとあります。そして小説の最後、松山から帰ってきた坊ちゃんは清を引き取りますが、「清は玄関付きの家でなくとも至極満足の様子であったが気の毒なことに今年の二月肺炎に罹って死んでしまった。・・・だから清の墓は小日向の養源寺にある」と記して、この小説は終わっています。このように、明治の末でもまだ、玄関付きの家というのは特別なものでした。

もとを尋ねますと、玄関の「玄」とは、玄妙とか幽玄などというときの「玄」でありまして、「奥深い、神秘的な」という意味。「関」は関門・関所の意味であります。したがって、「玄関」とは、玄妙な場所に進み入る関門でありまして、本来は、禅宗寺院の方丈の入口をいうのです。我々俗人は今でもここからは入れない。大徳寺の大仙院とか、竜安寺の石庭を拝観するときに、皆さんは玄関から上がっていると思っていらっしゃるかもしれませんが、我々が招じ入れられるのは庫裡（くり）で、これは台所口なのです。

そのような宗教的な意味を持つ「玄関」が、一般的な民家の入口をいうまでに落ちぶれてくるのには、室町時代以降の長い歴史があるわけですが、江戸時代には、武家屋敷の式台のある入口を「玄関」と呼ぶようになり、一般民家の入口までをも玄関というようになるのは、実に昭和の初期以降のことだと思います。

アメリカの民家には、日本の家のような玄関に当たるものはありません。ドアを開ければすぐ部屋です。これは靴を脱がずに家に入る生活習慣によるものでしょう。そのような構造は、十年間をアメリカやヨーロッパで暮らした新島であっても、とても受け入れられるものではなかったのではないのでしょうか。

このように、洋風住宅に付けられた和風の玄関や、新島が生涯ことあるごとに描いた絵、また感慨を託した漢詩や父親譲りの巧みな書などに、幕末に育った新島の変わらない一面をみることができましょう。新島は大変な教養人でありました。

新島の「雷神図」

新島が十代に描いた絵が残っておりますが、本格的に狩野派を学んだ絵です。そして上海からボストンへの航海中も海鳥その他のスケッチを試み、アメリカにおいてもさまざまなスケッチをしています。中でも面白いのは、アーモストの図書館に秘蔵されている「雷神図」です。昔の日本では、雷をこんな鬼のような姿をしたものと考えていたと、アメリカの級友たちに説明した絵ですが、手本もなく描いたにしては、まことに本格的な雷神図です。

私たちは洋行帰りの新島という面だけを見ていて、新島裏が武士の家に生まれたことを忘れがちですが、新島はやはり武士だったということを見落としてはいけないと思います。

日本を脱出するときもその心情を、

ものの心の思い立田の山もみじ

にしき着ずしてなど帰るべき

という一首の和歌に託しております。ものの心（武士）としての意識は、生涯新島を貫いていたものと思われれます。

新島の苦悩と臨終

明治十五年、大学設立に向けて本格的に取り組み始める一方、医学校の設立を企画し、また徴兵令の改正で、私立学校の生徒は徴兵の猶予が認められないということで退学者が続出る。それを食い止めようとしてこれまた奔走する。新島の健康は蝕まれていきます。新島の健康を心配した周囲は、国内での多忙さから新島を解放しようと、静養を兼ねての欧米旅行を勧め、新島は明治十七年四月に神戸港から出発します。しかし、スイスでは八月、サンゴタール（St. Gotthard）

の山道を登る途中、呼吸困難となり、ようやくたどり着いた山頂のホテルで、死を覚悟して英文で遺書をしたためるというような事態さえありました。幸い九死に一生を得て、九月末にはボストンに到着し、ハーディー夫妻らとの再会を果たすことができました。

新島の留守中、明治十七年九月には彰栄館が竣工し、京都で初めてのレンガ建築が姿を現します。

アメリカ滞在中、アメリカン・ボードとの意見交換や交渉などもあって、新島が帰国するのは明治十八年も十二月のことですが、旅の疲れを癒す間もなく十二月十八日には、同志社創立十周年記念会が行われました。

明治十九年には礼拝堂が、明治二十年には有終館が竣工して、今日、今出川キャンパスの中心をなす赤レンガの建物が建ち並び、古都京都の中で同志社の偉容が示されていきますが、大学設立への資金集めは容易なことではなく、また私などにはよくわかりませんが、アメリカン・ボードとの軋轢なども生じていったらしく、新島の苦悩は深くなっていきます。ジョンソン・チャペルに掲げられている肖像画の表情は、まさにそのような新島の苦悩を映し出しているように思われます。勝海舟は、亡くなる二、三カ月前に訪ねてきた新島のことを「顔色衰え、たいそう弱ってやってきた」と述べております。

新島は明治二十三年一月二十三日に療養先の大磯で亡くなりますが、これはその臨終を描いた絵です。前々から私はこの絵を見るたび、「前年の暮から苦しんでいたのに、なぜ新島は入院しなかったのだろう」という疑問が、いつもわいておりました。

新島が重病に陥っていることは友人・知人にも知らされていて、時の外務大臣井上（いのうえ）馨（かおる）などは、看病に当たっていた人たちに、「この人を生かさなくてはならぬ」という電報をさえ打っています。それくらいだったら、病院の世話も、政界の有力者たちからあったのではないか。そういう疑問がわくのは当然でしょう。神奈川県の大磯という

所は、当時保養地として知られていたようですが、徳富蘇峰が紹介したであろう百足屋（むかでや）も、ごく普通の旅館にすぎません。新島の診療に当たっていたのは、神田駿河台にあった山龍堂病院院長の榎村（かしむら）清徳（せいとく）という一流のお医者さんですから、入院を勧めなかったわけではないでしょう。

なぜ入院しなかったのかという疑問を抱きながら、今回のお話をするために、同志社英学校の設立時から新島と苦労を共にした、デイヴィスの書いた新島襄の伝記を読み返していましたら、入院はともかくとして、亡くなる一日か二日前に、マットレスとベッドとが入手されていたと記されていました。そのベッドに寝かせようとしたのですが、新島は、「自分は乱世に生を受けた者であるから、そんな楽な状態で死ぬ値打ちはない」と言って断ったのだそうです。ベッドに寝ることをも拒んだくらいですから、おそらく入院の話があっても拒否したのかもしれませんが、この話を讀んだとき、「やっぱり新島は侍だったんだなあ」という思いを改めて深くいたしました。

新島の教育方針

さて新島の教育方針といえば、「同志社大学設立の旨意」に示された

「其（その）目的とする所は、独り普通の英学を教授するのみならず、其徳性を涵養（かんよう）し、其品行を高尚ならしめ、其精神を正大ならしめんことを勉め、独り技芸才能ある人物を教育するに止まらず、所謂の良心を手腕に運用するの人物を出ださんことを勉めたりき」ということでありましょう。

単に学問に秀でただけではなく、その徳性を涵養し、品性を高め、おおらかで堂々とした精神の持ち主を育てること、これは今日まで、同志社教育における根幹を成すものだと、思います。新島は、それらを涵養・育成するものがキリスト教精神であるとしたのでしょうか、広くみればそれはキリスト教精神だけに限られるものでもないでしょう。

私が同志社に入学しましたとき、一回生の教養科目で住谷（すみや）悦治（えつじ）先生の講義を受けたことがあります。住谷先生は後に、同志社の総長になられた方です。住谷先生は優れた学者であるだけでなく、立派な、私どもには足下にも及ばないような教育者であられた、と今思います。また先生は絵も描かれ、石川啄木の跡を訪ねられたりもする教養人でありました。

住谷先生は最初の授業のときに、入学したばかりの私たちに対して、「あなた方は今日から、同志社大学生として、ladyでありgentlemanであるとして扱われる。その自覚を持って行動して欲しい」とおっしゃいました。「gentlemanであれ」ということこそ、新島のいう「徳性を涵養し、その品行を高尚ならしめ、その精神を正大ならしめた」人物のことでありましょう。先生はそれをgentlemanという言葉で表されたのでした。

また住谷先生は、「授業の途中で退席するなどということは、好ましいことではないが、事情があっても途中で退席しなければならないこともあろう、そのときには、一度きちんと立って一礼してから退席しなさい」ということなどをはじめ、礼儀についての教育も講義の最中に怠りませんでした。

私どもの学生時代には、大教室の講義では、毎時間、大きな拍手とともに講義が始まり、拍手とともに講義が終わりました。拍手をして教師を迎えることにより、それまでの学生たちの私語がおさまリ、講義を聞く姿勢が整うわけです。ひょっとしたら、そういうことも住谷先生は新入生に教えられたのではないかと思います。

Lady and gentlemanであれ

「gentlemanであれ」という呼びかけを、今の先生方は学生諸君に対してあまりなさらないと思いますが、そう呼びかけて学生諸君の自覚を促すこと、これは必要でありましょう。

このごろの皆さん方は、孔子の『論語』などはあまりお読みにならないでしょうが、孔子が理想的な人格者のことを君子と呼んでいることは、ご存じだと思います。たとえば、

子曰く、君子は言に訥（とつ）にして（口数を少なくし）、行いに敏（びん）ならんことを欲す（行動は敏速でありたい）。

子曰く、君子は争う所なし。

子曰く、君子は泰（たい）らかにして奢らず、小人は奢りて泰らかならず。

などなど。

ところでアーサー・ウェリー（Arthur Waley）の訳した英訳本を見ますと、この君子という言葉は、まさにgentlemanと訳されているのであります。たとえば「君子は口数を少なくし、行動は敏速でありたい」の英訳は、

The Master said, A gentleman covets the reputation of being slow in word but prompt in deed.

となっています。

そして孔子自身も、君子というのは、雲の上の理想的人物なのではなくて、教育と修練によって、誰でも君子の高みに達することができるのだ、と考えております。ですから孔子は、弟子たちに諸君、と呼びかける。宮崎（みやざき）市定（いちさだ）の説に従えば、諸君というのは、諸君子の略、君子たちよ、という呼びかけなのであります。

そういうわけで、同志社に学ぶ皆さん方は、みな品性を高めることを心がけて欲しい。lady

でありgentlemanであることを要求されているのです。

それについて思いますことは、最近の学生諸君は、gentlemanである以前に、「学生」としての意識が足りないのではないかと危惧しております。と申しますのは、二回生の終わりくらいになりまして、学生諸君自身が自らのことを学生と言わないで、高校時代と同じように生徒と言って平然としていることがしばしばあります。これは何でもないことのように見えますが、小学生を児童、中・高校生を生徒、大学生を学生、という呼び分けには、それなりの意味がある。その区別には精神的に大きなものがあると言っていい。大学生にもなつて、自分のことを生徒と言っているようでは、大学生としての自覚がいつまでも持てないと思います。

大学生とは、学問をする人間のことであります。それは受け身に教えを受けるだけのものではなく、自らが問い掛けをしていく積極的な姿勢が要求されるものであります。どうぞ皆さん方は、生徒手帳ではなく学生証をお持ちなのですから、それにふさわしく、lady and gentlemanとして、同志社の学生としての誇りを持って過ごしいただきたく存じます。

とりとめもないお話をいたしました。ご清聴ありがとうございました。これで終わらせていただきます。

二〇〇六年十一月十日 同志社スピリット・ウィーク「講演」記録